



キャンプ・アブバカルで暮らすMILF地域指揮官のバイキング家＝マギンダナオ州バリラ町

Bangsamoro 報告

<第17話>

ミンダナオ平和構築支援の現場から

中坪 央暁

(国際開発ジャーナル社編集委員)

キャンプ・アブバカル

この人物を初めて見かけた時、まるで土の中から生まれてきたような力強く精かな印象を受けたが、村を訪ねてみて、ただ者ではないと改めて感じた。真っ黒に日焼けしたサリック・バイキング（52歳）は、小柄ながら農民というより戦士であり、それもそのはず、ミンダナオ紛争中はモロ民族解放戦線（MILF）の8つの戦闘部隊、約2,400人を指揮する“旅団長”だったというから、政府軍であれば将官クラスである。

マギンダナオ州バリラ町マダラム集落は、イスラム教徒ばかりの人口約6,000人、丘陵の土地を耕してトウモロコシや陸稲、ココナツなどを栽培する農山村である。エストラダ政権による2000年

の「全面戦争」で陥落するまで、MILFの本拠地だったキャンプ・アブバカルの中心地域にあり、自動小銃を手にした男たちを普通に見かける。

バイキングは、1970年代に始まるミンダナオ紛争の渦中を生き抜いた一人である。マルコス政権による戒厳令下の74年、政府軍に父親を殺され、その後は母親が女手一つで子どもたちを育てた。「農作業を手伝うために小学校も卒業できず、マドラサ（イスラム学校）でアラビア語を習いましたが、英語は今も自分の名前を書くのがやっとです」。それでも持ち前の勇敢さと統率力で、MILF指揮官にまでなった。しかし、全面戦争の際に家を焼かれ、その混乱の最中に病状が悪化した母親

を病院にも連れて行けず死なせてしまった。

妻と3男1女、孫など総勢10数人で暮らす木造トタン屋根の家は、屋内に間仕切りがなく、学校の教室か集会所のように見える。「何しろ、もともとマドラサだからね。家を失って仮住まいしているうちに、建て直すカネもないし、そのままになってしまって……」とバイキングは屈託なく笑う。簡素な調理場が外にあり、トイレはその辺の草むらで済ませる。少し離れた泉の水を汲み、電気は屋根の小さなソーラーパネルでまかなう。約6haの農地を耕して得られる現金収入は、年間2万ペソ（約5万2,000円）しかないが、やり繰りして末娘をコタバトのポリテク・カレッジ（職業訓練大学校）に進学させている。

バイキングを訪ねるに至ったきっかけは、国際協力機構（JICA）による「ミンダナオ紛争影響地域コミュニティ開発のための能力向上支援プロジェクト」（通称CD-CAAM）の事業地・北ラナオ州マトゥンガオ町に今年1月、彼を含むキャンプ・アブバカルの農民代表12人が視察に訪れたことである（当連載2016年4月号参照）。JICAはMILFの拠点ということで開発が遅れたアブバカルにマトゥンガオ事業の成功事例を持ち込み、農業振興による生計向上を図って、戦闘員の武装解除・社会復帰を支援しようとしている。

「マトゥンガオで野菜栽培やヤギ飼育の取り組みを見て、ここでもやってみる価値があると思いました。子どもや孫たちが豊かに暮らせるように、もっと稼がないとね」と話すバイキングは、「若い時から戦い続けてきたが、戦争が何も生まないことは一番良く知っています。政府と約束したバンサモロ政府が一日も早くできて、本当の平和が実現することを祈っています」と付け加えた。身内を含む無数の死を目の当たりにし、今も決して恵まれた環境にあるわけではないバイキングが、サムライのような気骨を失わないのは、生来の人間的な強さによるものなのだろうか。



農民組合会長を務めるサドト（右端）と家族＝マギンダナオ州マタノグ町

キャンプ・アブバカルは、マギンダナオ州と南ラナオ州の6町村にまたがる広い範囲を指し、かつての軍事拠点の名残でMILF側はキャンプと呼んでいるものの、現在はイスラム教徒が居住する普通の農村地帯に過ぎない。それなりに大きな集落もあるが、標高400m前後の域内の多くは曲がりくねった未舗装の山道が続き、深い谷川に架かる小さな橋を渡って移動しなければならない。そうした地勢は他所者が大挙して踏み込みにくく、戦時の防衛には適しているのだろうが、平時の開発には著しい障害になる。バンサモロ開発計画でも、農村と市場を結ぶ“Farm to Market”道路の整備が優先課題に上げられており、特にアブバカルではその緊急性が高いと思われる。



先のマトゥンガオ視察の際、終始メモをとりながら一番熱心に質問していたクダンディン・サドト（62歳）は、マギンダナオ州マタノグ町サパド集落で子どもや孫・ひ孫に囲まれて暮らしている。すでに白髪の好々爺といった趣があるが、サドトも紛争中、300人のMILF兵士を率いる大隊長として戦い、アブバカル陥落時の戦闘で腰を撃ち抜かれて重傷を負った。危うく一命を取り留めたもの

の、シャツをまくと銃創がはっきり残る。

息子や娘婿たちと約5haの農地でトウモロコシや陸稲、ココナツを栽培しているサダトは、地元サパド農民組合の会長でもある。「2013年に設立した組合には444人のメンバーがいて、農作物の生産や出荷で助け合っています。毎月100ペソ（約260円）の会費を集め、必要に応じて貸し付けたりするが、天候次第では不作になって借金を返せなくなるケースもありますね」。

サダトがマトゥンガオ視察で現地の農民たちに質問を繰り返していた背景には、組合会長としての責任感もあったようだ。「非常に有意義な視察で、私たちが広大な農地を持ちながら、それを十分生かしていないことが分かりました。市場で売れる野菜を育てたり、皆で協力してティラピア養殖やヤギ飼育に挑戦したりすれば、組合メンバーに安定した現金収入がもたらされるはずです」と話し、JICAによる技術指導に期待している。マタノグ町は前出のバリラ町より幹線道路にアクセスしやすく、この地域の中核パラン町も近いので、生産性を高めれば、流通ルートの確保はそれほど難しくないかも知れない。

もうひとり、同じマタノグ町の中心部に住むエドレス・ハビビ（40歳）は、最前線の戦闘員ではなく、部隊の管理部門担当だったが、全面戦争では何度も銃撃戦をかいぐり、一緒にいた従兄弟が戦死したという。小学校5年生を筆頭に4人の子どもの父親であるハビビは、少し離れた所にある農地を耕しながら、町中でバイクタクシーをして1日200ペソ（約520円）程度の日銭を稼いでいる。町中にあるハビビの家は、今回訪ねた3人の中では最も恵まれていて、木造トタン屋根の簡素な家ながら電気が通じ、パナソニックの冷蔵庫、韓国LG製テレビなど家電製品がそろっている。すぐ側にはクウェート政府の支援で設けられた共同水栓もある。さらにはOFW（Overseas Filipino Worker）

＝海外出稼ぎ労働者としてカタールで働くエンジニアの長兄がいて、一族にはそれなりの送金があるようだ。

子ばん脳なパパといった感じのハビビは「子どもたちは高校や大学で勉強して、良い仕事に就いてほしい。この町の農業やビジネスが活発になって、皆が豊かになることを望んでいます」。傍らに座ってインタビューの様子を見ていた高齢の母親ラビア・アリは「亡くなった夫もMILFの支持者でした。紛争中は家や財産を焼かれて逃げ回ったものですが、12人の子どもたちは幸い立派に育ち、看護師や助産師、技術者などとして生計を立てています。このまま平和が続いてほしい。もう戦争はご免ですよ」と話した。

何もバンサモロに限った話ではないが、フィリピンの村々では大家族が3～4世代で暮らす家庭が珍しくなく、お年寄りが大切にされているように見える。こうした大家族の結束、あるいはイスラム・コミュニティの連帯感が、ミンダナオ紛争を乗り越える根源的な力になったのだろう。

余談ながら、行く先々でバナナの葉でくるんだココナツや米飯の菓子、地元産の豆をひいて煮出した素朴なコーヒー、生ぬるい瓶入りジュースを熱心に勧められた上に、帰路に気が付くと、ピッ



4人の子どもを持つハビビ（右端）＝マタノグ町

クアップの荷台には数房のバナナやトウモロコシ、野菜2〜3種がいつの間にか積まれていた。裕福とは言えない村人たちの心遣いに、手ぶらで訪ねたことをしばし反省した。



バンサモロの平和構築支援では、国際機関も重要なプレーヤーである。その一つ、国連世界食糧計画（WFP）コタバト事務所には、プログラムオフィサーの前川直樹（44歳）が2014年8月から駐在し、「学校給食プログラム」による就学支援、母子栄養強化事業、農村部の生計向上支援を実施している。「40年におよぶ紛争の影響で貧困世帯が多い当地では、栄養状態が悪い子どもをしばしば見かけます。約250校・6万5,000人を対象にした給食事業は、就学率向上と栄養改善を助けるだけでなく、友達と一緒に食べることで、学校の楽しさ、勉強の大切さを理解してもらうのが目的です」。生計向上は食糧や賃金などの対価を支払って、かんがい施設・農地整備の共同作業を行い、農業振興につなげると同時に、紛争影響地域のコミュニティの一体感を醸成することを意図している。40人余りいる職員のうち、英国人の上司と前川以外は現地スタッフである。

大学時代に国際関係論・公共政策を専攻し、農林水産省国際部で農水産物の貿易・関税問題を手掛けていた前川は、在職中に米タフツ大学大学院に留学し、外交交渉・国際紛争解決を学んだことが転機になった。「大学時代にNGOツアーで東南アジアを訪ね、貧困の現実を目の当たりにして衝撃を受けました。国家公務員になってからも、国際協力の仕事に関心を持ち続けていたんです」。内閣府などへの出向を経て、外務省のJPO（ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー）に合格し、退官したのは31歳の時のこと。国連開発計画（UNDP）レソト事務所に勤務した後、WFPに2005年正式採用され、インド洋大津波で壊滅的被害を受けたインドネシア・スマトラ島のバンダアチェ、内戦を逃れて国内避難民が殺到するソマリ



WFPコタバト事務所の前川

ア北東部、スリランカ内戦の混乱が続く同国北部と、自然災害や紛争の最前線で、緊急食糧援助や避難民帰還支援に取り組んできた。

「耐えがたく困難な状況に置かれた人々を見守り、安心感を与えるのが私たちの仕事だと思います。人道援助の現場は予定調和では収まらず、先が読めないことの連続ですが、食べ物を手にした人々のほっとした表情を見ると、大きな充実感を覚えます」。単に食糧を提供するのではなく、「ミンダナオ和平の重要な時期に、平和構築の文脈で地域の安定に貢献し、バンサモロ復興から開発につなぐ橋渡しに寄与できれば」と前川は話す。



フィリピン全国統一選挙が5月9日に行われ、大統領選はミンダナオ島の最大都市ダバオの市長、ロドリゴ・ドゥテルテ候補（71）が、アキノ大統領が後継指名したマヌエル・ロハス前内務相ら中央政界の有力3候補を退けて当選した。型破りな言動から「フィリピンのトランプ（米共和党）」と呼ばれるドゥテルテ次期大統領は、地元ミンダナオで特に人気が高い。バンサモロ基本法（BBL）支持を表明するなどミンダナオ和平推進の立場にあるが、この国に連邦制を導入するという主張が現行の和平プロセスと整合するのか、成り行きを注視する必要がある。 ＊文中敬称略（つづく）